二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

呪い屋 零2

邪神の淫夢に妖華堕つ

小説 斐芝嘉和
挿絵 高浜太郎

第一章　妖刀村正　006
第二章　肉蛭の群　030
第三章　羽賀御影　042
第四章　宮内早苗　070
第五章　邪神信徒　081
第六章　髑髏蜘蛛　113
第七章　犬　124
第八章　乙女たちの宴　152
第九章　淫儀の果てに　181
エピローグ　245

登場人物紹介

Characters

佐々木（ささき）　零（れい）

星辰学園の一年生として留年し続けている問題児だが、呪術師としての腕は一流で、「呪い屋」の異名を持つ。偽悪趣味の皮肉屋。

宮内（みやうち）　早苗（さなえ）

霊媒としての類い希な資質を持つ、小柄で童顔の少女。お人好しで内向的な性格をしている。無邪気なトラブルメーカー。

羽賀（はが）　御影（みかげ）

星辰学園理事長の令嬢にして、羽賀退魔社の社長。見かけはおっとりしているが、情け容赦ない性格。未来を予見する能力を持つ。

陳（ちん）　青龍（せいりゅう）

秘密結社ORGANON幹部。本部から日本支社に派遣された、冷静沈着な策謀家。

物部（もののべ）　真人（まひと）

フリーの呪術師。他人の苦しむ様子に興奮を覚える異常者。

山城（やましろ）　柔悟（じゅうご）

秘密結社ORGANONの日本支社会長。

賀茂（かも）　秀明（ひであき）

秘密結社ORGANONの日本支社幹部。

『第五章　邪神信徒』より

ハッとして見下ろすと、引き伸ばされたナイロン地の下、確かに白い股布に灰色の染みがある。硬い指が擦るたび、染みはジワジワと広がっていく。
「感じているのか？　いやらしい娘だ」
「ち、違いますっ！」
反射的に否定したが、蠢く指に擦られたその場所はいつもより敏感になっていた。秘裂から滲み出た体液がパンティに染み込み、ぬるぬると滑っているのが分かる。気持ち悪さと恥ずかしさに、御影は唇を噛んだ。
「焦れったそうだな。直接弄って欲しいのか？」
「……勝手に言ってなさい！」
男たちの戯れ言になどつき合っていられない。どうせ術のせいで身動きできないのだ。
（したいようにすればいいのよ――）
半ばなげやりに思いながら目を瞑り、不快な愛撫に耐える。
そんな風に言われると意地悪したくなるんだよな、と誰かが呪文を唱え始めた。なにか仕掛けがあったのか、歌うような声が響くにつれワインレッドの布地が徐々に縮み、少女の身体を締め上げる。
「っくぅ……っ！」
ただでさえきつかった胸が一段と苦しくなり、御影は真っ赤になりながら息を吐いた。

悦びに喘ぐ声に似ていて羞恥が湧くが、それを掻き消すほどに乳房が痛む。万力で締め上げられているようだ。前後左右から圧力がかかり、呼吸することさえ難しい。

寄せ上げられて硬くなった乳房に男の手がかかった。優しく撫で擦るようにしながら、

「服を脱ぎたいだろう？」

甘い声で囁く。御影は顔を顰め、懸命に首を左右に振った。どんなに辛くても、こんな卑怯な男たちに裸を見られたくはない――しかし。

「あ……や、やめ……ぅうぅ」

指先から気を注がれ、胸乳の芯が熱くなる。乳首が痼り乳房が膨らみ、布地がギシギシと音を立て始めた。完全に息が止まり、気が遠のきかけて――不意に圧力が消えた。

苦痛から解放されてホッと一息ついた御影だが、すぐに自分の胸を見下ろし愕然となる。上着のボタンが弾け飛び、シャツが左右に裂けて巨大なマシュマロがこぼれ出ていた。桜色に染まった脂肉の塊は自由を悦ぶようにぷるぷると揺れ、その先で紅く色づいた乳首は小指の先ほどに大きくなっている。これまで互いに押し潰し合っていた胸の谷間には汗の皮膜が浮いて、ぬらぬらと妖しく光っていた。好色な視線を柔肌に感じ、頭が真っ白になるほどの羞恥を覚えたが、禁呪のせいで逃れられず、頬を紅く染めながら固く瞼を閉じ、肩を震わせることしかできない。

「胸が苦しいのだろう？　揉んでやるよ」

柔肌に、直接男の手が触れた。苦痛から解放されたばかりの柔肉は、揉みほぐされることを素直に悦んでしまう。紅殻色の乳暈（にゅううん）の縁をなぞられ、痛いほどに膨らんだ乳首を人差し指と親指に挟まれてクリクリされると、思わず甘い吐息が漏れた。

「はぁう……っ！　や、やめ……ふぁっ！」

胸に発した愉悦の波は背骨を伝って脳を蕩けさせ、腹に広がり子宮と膣を刺戟した。肉割れから溢れ出る蜜が増え、お漏らしでもしたようにパンティを濡らす。ストッキングの奥、白い薄布が透けて媚肉にピタリと貼りつき、恥毛の茂みやクリトリス、肉土手を押しのけて顔を覗かせた肉ビラの縁などを浮き上がらせた。

「そろそろ交代してもらおう」

少女を弄っていた男たちが離れ、代わりに山城以外のふたりが手を伸ばした。肉悦に喘ぐ御影の背に新たな呪符が貼られる。

「え……な、なにを……あっ!?」

身体が勝手に動き始めた。両手が床について身体を支え、尻が持ち上がる。膝が土を離れ、手と爪先で身体を支える不安定な四つん這いの姿勢となった。男のひとりが御影のネクタイを掴み、結び目を首のうしろに回して引き綱のようにする。

「そうら、お散歩だぞ」

巫山戯（ふざけ）た言葉を合図に、少女が犬のように這い始めた。ネクタイの端を持つ男のうしろ

について、地下室の中をぐるりと一周する。腰を突き出すような格好のため、洋梨型の尻を覆うナイロンの薄布は限界まで伸びきり、ほとんど透明になって白桃のような肌の色を浮かせていた。太腿が前後に動くたび濡れぼそった肉裂が捻れ、互いに擦れてにちゃにちゃと音を立てる。溢れ出した淫蜜が内腿を濡らし、膝から滴り落ちて床を汚した。規則正しく動く腕の間では、衣服の圧力から解放され、重力に引かれて一段と大きくなった乳房がたぷんたぷんと重そうな音を立てて揺れる。

（い、いや……こんな格好……）

うしろから覗き込まれた秘部に、熱い眼差しを感じた。競り市に連れ出された牛はこんな気分だろうか、とふと思ってしまい、羞恥が倍加する。追い討ちをかけるように、

「弄られてすぐ濡らすようなはしたない娘にはお似合いの格好だな」

嘲笑が浴びせられ、耳までカァッと紅くなった。

（悔しい――っ！）

手を叩いて悦ぶ男たちを横目で睨み、歯軋りをして、こぼれそうになる涙を懸命にこらえ、挫けそうな自分を叱咤する。こんな下劣な男たちを悦ばせるのはイヤだ。それに、カルト教団の信者たちに負けたとあっては羽賀の名が廃る。

「……こんな子どもじみた遊びをしたかったのですか？　思った以上にくだらない方たちなのですね」

四つん這いのまま昂然と顔を上げ、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて言い放った。自分の声がまだしっかりしていることを知り、気持ちが少しだけ落ち着く。

この程度の反抗は予想済みらしく、男たちは挑発を低い笑いでいなした。

「子どもじみた遊びというなら、こんなことをさせても平気だな」

ぱちん、と指が鳴らされると、片方の足が勝手に上がり、牡犬が小便をするような姿勢になった。三角地帯を自ら開くような格好に、御影は息を呑む。小水は出ないが、代わりに肉割れから溢れ出た淫汁が腿を濡らした。数歩進んで立ち止まり、右、左、と交互に足が上がる。二度三度と開脚運動を繰り返しているうちにパンティが撚れ、尻と陰阜の割れ目に喰い込んできた。濡れた布にクリトリスが巻き込まれ、一歩ごとに締め上げられて、

「く……うぅ……んん……」

肉の悦びが、羞恥や屈辱の感情を押しのけて身体の中に満ちてきた。髪の生え際や耳の裏、脇の下や内腿に汗が滲み出し、牝の匂いが漂い始める。

「いい顔になってきたな」

ネクタイを引いていた男が立ち止まり、しゃがみ込んだ。ハッと強張った少女の紅い頬を掌で包み込み、無理矢理仰向けにして唇を押しつける。

「んっ⁉　んンぅっ！」

口唇を這い回る熱い舌、顔に吹きかかるヤニ臭い息。不快感に美眉を歪め、身を硬くし

た御影の周囲に、男たちが群がる。身体の下に手が伸びてきて、垂れ下がる巨乳が掴まれた。脂肉の厚みを確かめるように武骨な指が沈み込む。尻の上に手が置かれ、太腿の間から掌を上に向けた男の手が差し込まれた。硬い指が濡れた薄布の上からクリトリスを圧し、肉割れをレールとしてツウ、ツウと前後に動く。

（や、やめて……やめてったら……）

指の圧力に歪められた乳房が熱を持ち、脂肉の奥に疼きが生じる。蕾の縁をくすぐられた淫華は粘膜の襞を波打たせ、花芯を弛めて甘酸っぱい蜜をこぼした。熟した野苺のような唇は男の舌に舐め回され、無理矢理開かれて口の中まで探られる。弄ばれる屈辱に歯噛みするが、胸や股間からは肉悦が押し寄せてきて怒気を維持できない。

「そろそろ準備をしようか」

尻のほうから声が聞こえ、淫部を弄っている手が止まった。カチッと小さな音がして、秘肉の辺りが温かくなる。温度は急激に上がり、痛いほどになった。

「な……なにを……あぁっ!?」

顔を舐め回している男に額をぶつけて首の自由を取り戻した御影は、頭を逆さにして股間のほうを覗き見、絶句した。垂れ下がる双房の向こうに、火の灯ったライターを握る手が見える。青い炎が繊細な場所を炙っているのだ。

「イヤっ！　やめて……やめなさいっ！」

「大丈夫、もう終わりだ」
ライターの蓋が閉じ、炎が消えた。ホッとしたのも束の間、今度は鋏が持ち出される。
「……っ！」
火傷しそうなほど熱せられていた媚肉に、冷たい金属の感触。炙られたストッキングに大きな穴が開いているらしく、柔肌に直接触れてくる。骨張った指がパンティを抓み、少し持ち上げて刃にかけた。濡れた薄布はほとんど抵抗なく断ち切られる。
ぐっしょりと濡れた薄布が取り除かれ、汗と淫液に蒸れた秘部に冷たい空気が流れ込んできた。アケビのような肉土手は赤らみ、透明の粘液に覆われてぬめぬめと光っている。拘束を解かれた肉薔薇は蜜を滴らせながら嬉しそうに綻んで、粘膜の花弁を開いた。解放感が湧き上がり、思わず吐息が漏れてしまう。
「気持ちよさそうだな」
「……ち、違います……っ！」
反射的に逆った否定の言葉は、情けないほど上擦っていた。感じていることを自白しているようなものだ。羞恥が全身を駆け巡り、カァッと体温が上がる。自分で分かるほど顔が熱い。黒髪が滲んだ汗を吸って重く湿り、濡れたように輝き出す。
「まだ足りないのか？　欲張りだな、羽賀の娘は」
乳房にかかる圧力が倍加した。四つん這いの少女の左右に尻を下ろした男たちが、両手

を使って牛の乳を搾る要領で揉み始めたのだ。握力は強く、痛いほどなのに、肉丘の麓から先へ向けてぎゅうぎゅうと圧されるとなぜか気持ちいい。指が沈み込むたび、脂肉の芯が疼く。乳暈の奥に痼りが生じ、紅殻色の乳首が真っ赤に熟したグミのように膨らんだ。

「くぅぅ……あ、あ、あ……っ!?」

揉み搾られる胸に気を取られていると、不意に蜜壺の口に硬いモノが押し当てられた。人肌ほどに温かいが、もっと硬い異物――それが、丸みのある先端で肉ビラをこじ開けつつ、少女の胎内へ潜り込むタイミングを計っているようにもぞもぞと蠢いている。

「そうら、これが欲しいんだろう?」

陰部に擦りつけられているのは、男根を象(かたど)った石の棒であった。長さは三十センチほど、直径は四センチ以上もある。丸みを帯びた鼻先から微妙な曲線を経てエラを張る亀頭の形状は妙にリアルで、下側には糸が撚れたような筋までが精密に再現されていた。リンガとも〈山の神〉とも呼ばれる、原始的宗教の御神体だ。男が呪文を唱えると、石棒の背に朱色の梵字が浮き上がる。亀頭の先から淫らな呪力が迸り、少女の肉薔薇を炙り始めた。

「い……要らない……要りませんっ!」

股間から染み込んでくる抗しがたい愉悦の波動。蕩けそうになる頭をしきりに振って、御影は震える声で叫んだ。しかしその拍子に腹に力がこもり、膣洞が蠕動して内に溜まっていた蜜を押し出してしまう。溢れ出た熱い粘液が媚肉を伝い、桜色に染まった内腿を濡

らしてぽたぽたと滴り落ちる。
「嘘はいかんなあ――ほら、お前のココは我慢できずによだれを垂らしてるぞ」
いやらしく笑った男が石棒に少女の蜜をたっぷりとまぶし、わざわざ本人の鼻先に突きつけた。瞼を閉じて顔を背けても、牝の芳香はお構いなしに鼻の中へ入ってくる。
「い、いや……やめて……」
自らの淫香に咽せながら、御影は弱々しい声で呻いた。熟れ柿のように紅くなった頬を涙が伝う。男たちに弄られて啜り泣きながら秘処を濡らす自分が痴女のように思え、死にたくなるほど恥ずかしい。
男は少女の長い黒髪で神像を濡らす牝蜜を拭うと、低い声で呪文を唱えながら、石の亀頭で軍礼服に包まれた背を撫で始めた。性愛による得悟を謳う聖歓喜天（せいかんぎてん）の真言。石棒の重みを受けた場所がじんわりと温かくなり、なんでもない肌が性器のように敏感になって、汗に濡れたシャツが擦れるだけで胸が高鳴ってしまう。
「ふぁっ……はぁンん……んぅ……あっ！」
不意に呪縛が途切れ、御影は土間の上に倒れ込んだ。神像の呪に干渉された束縛の呪符が効力を失ったらしい。
（こ、これで逃げられる……）
自分の意思で腕をつき、身体を持ち上げようとする。だが、淫呪と愛撫に火をつけられ

た肉体は溶けた鉛のように熱く重く、腰から下に力が入らない。ひしゃげた蛙のような格好で、ただ闇雲に手足が動くだけ。
「ダメだろう、お嬢様がそんなはしたない格好をしては」
喘ぎながら藻掻いている少女に、男たちの手が伸びた。
「ひっ……い、イヤっ！　やめ……放して……っ！」
「まだまだ正気のようだな。結構、結構」
細い手首を掴まれ、背の側に捻り上げられた。黒髪が鷲掴みにされ、グイッと頭を起こされる。上半身を引き起こされ肩を押さえられ、白州に引き出されてきた罪人のような格好になった少女の前に、作務衣を着た筋肉質の男――賀茂秀明（かもひであき）が立つ。
「まさか羽賀の娘にこのようなことをしてもらえるとは」
「え……ひっ⁉」
衣の前が開けられて、赤黒い男根が飛び出してきた。呪をかけられているのか、異様に強張り、痛々しいほど充血している。僅かに捻れた肉棹には血管の網目が浮き上がり、弾けそうに膨らんだ亀頭は粘液を滲ませてぬめぬめと光っていた。
「可愛い顔してるくせに、いやらしいお嬢様だ」
「な、なにを言って……あ、あぁ……い、いヤっ⁉」
頭を押され、唇に熱塊が触れた。背けようとするのに首は動かず、そればかりか勝手に

口が開いて肉棒を受け入れてしまう。舌の上におぞましい重み。喉に触れるほど挿し込まれると、唇が閉じて肉茎を支えてしまった。

（イヤ……こんなのイヤ……）

口腔を占拠した男根の大きさに涙しているのに、コントロールを奪われた唇と舌は淫棒を搾り、舐め回す。男がゆっくりと腰を回すと、硬い亀頭が上顎の粘膜を擦り、頬の内側を撫でてきた。吐き気を催すほどの嫌悪。なのに自分の口はじゅぷり、じゅぷりと卑猥な音を立てて肉棒をしゃぶっている。

「ようし、いいぞ、その調子だ――巧いモンだな。とても羽賀のお嬢様とは思えん。親父のペニスで練習したのか？」

嘲笑が胸に突き刺さる。呪術によって操られているとはいえ、男根を咥えているのは自分自身の口なのだ。味蕾には汗を煮詰めたような甘辛い味が広がり、口内の粘膜には気味の悪い形状を感じている。汚らわしさと屈辱に頭の芯が痺れてきた。

「そんなイヤそうな顔をするな」

首筋にリンガが押しつけられた。途端、身体の奥底から淫らな気分が湧き上がり、咥えた肉塊が愛おしくなる。

（ああ、そんな……どうして……）

淫棒を包み込む唇から、亀頭に押された舌や上顎から、桃色の陶酔が染み込んできた。

思考が朦朧として嫌悪感が遠のく。肉棒の太さに美しい顔を歪めた少女はぬちゅぴちゃと卑猥な音を立てながら愁眉を開き、頬を弛めて恍惚の表情を作る。
密着度が増すと、賀茂の男根が呪力を発していることに気づいた。口腔を埋め尽くすゴロンとした肉塊が蠢くだけで、温かな力が染み込んでくる。龍化の術のせいで呪術師の能力を失っていても、体内を力強く巡る気の心地よさまで忘れたわけではない。
(これ……これさえあれば……)
頭がぼうっとしてきた。強く吸引するとそれだけ多くの力が流れ込んでくる。身体に満ちる、懐かしい力感。
「ほう、嬉しそうに舐めおるわ」
男の声にハッと我に返る。いつの間にか腕は放され、自分から作務衣の裾にしがみついてしゃぶり立てていた。頭を押さえつける圧力もない。
(違う、違うの……これは呪力を補給してるの……ペニスが好きなワケじゃ、ない……)
身体を前後に揺らし乳房を波打たせながら必死に自分へ言い訳するが、
……ンじゅ、じゅぷ、じゅぱ、ヌちゅ……。
口からこぼれる湿った音が頭蓋の中で反響し、御影の心を責め立てる。いくら呪力を蓄えても、呪術師には戻れない。ペニスをしゃぶったからといって、元の自分になれるわけではない——。

「いやらしいお嬢様だ。そんなにオチンチンが好きか？」
邪淫の神像が少女の黒髪を梳くように動き、うなじから背に這い降りて新たな肉欲を引き出した。乳房や子宮の奥に熱い疼きを感じる。赤らんだ柔肌に香汗の珠が浮き、涙や唾液と混じり合いながら顎を下り喉を伝って胸の谷間を濡らした。石の棒が紅い布に覆われた背に8の字を描くと、
――弄られたい。
意思と身体が分離して、腰が勝手にくねり始める。
（ああ、ダメ……動いたらダメ……）
と思うのに、まるで磁石に引かれた砂鉄のように男根神像の呪に操られてしまう。
「よしよし、いい仔だ。そのまましゃぶっていろよ」
賀茂が御影の頭を押さえ、ゆっくりと姿勢を変えて土間の上に胡座をかく。御影は自然、犬のような格好で蹲ることとなった。赤らんだ顔を男の股間に埋め、水飲み鳥のように首を振る。うなじや尻に男の視線を感じるが、口の中で暴れる肉塊があまりにも心地よくて自分を止めることができない。
邪神を崇める男たちが膝をつき、啜り泣きながら口唇愛撫を続ける少女の身体に手を伸ばした。ワインレッドの布地に包まれた背を撫で、脇の間から手を伸ばして垂れ下がる乳房を揉む。ストッキングの穴に手がかかり、大きく破かれて丸い尻が剥き出しになった。

双臀の丸みは茹だったように薄紅色に染まり、汗の皮膜に覆われて輝いている。中央に走る谷間に指が喰い込み、左右に掻き分けるようにして開かれると、キュッと窄まった菊門や紅く濡れ光る会陰部が露わになって濃厚な牝の匂いが立ちのぼってきた。

（ダメ……イヤ、触らないで……）

頭では思っているのに、身体は拒もうとしない。揉み込まれている胸から、弄られている秘部から、拒みがたい愉悦が湧き上がる。

桜色に染まった乳房がむにゅむにゅと歪められると舞い上がるような気分が生まれ、硬く痼った乳首を抓られると瞼の裏で鮮やかな色彩が閃いた。指が沈み込むたび、

「ふ……ん……あンっ！」

自分でも驚くほど可愛い声が漏れてしまう。ただ重いだけで邪魔にしか思えなかった脂肉の塊が、いまは第二の快感中枢になっている。

背筋を辿っていた男根神像が尻の割れ目に達した。肛門に硬い亀頭の先を感じる。押し込まれるか、と緊張したが、ソレは焦らすように会陰部へ下っていった。

「ふ……ぁあ、あ……ン……」

石棒にくすぐられた恥帯が、じわじわと熱くなる。染み込んだ熱は子宮に達し、牝の本能を疼かせた。

——ほ、欲しい……。

欲望に膣洞が蠢く。充血した肉ビラは弾けそうなほど赤らんで、火照る肉土手を内から押し分けて淫蜜に濡れる粘膜襞の華を咲かせた。

「ぁンっ⁉」

肛門に硬いモノが潜り込んできた。男のひとりが中指を突き込み、中で鉤に曲げて尻を吊り上げる。汚らわしい穴を弄られるという息が詰まりそうな屈辱――だが、熱いペニスが口の中で蠢くと悦びが胸を満たし、どうでもよくなってしまう。

「会長もそろそろ、どうですか？」

「そうだな、正気があるうちに一度抱いておくか」

隅で床机（しょうぎ）に腰掛け少女が辱められる様子を見ていた山城が、おもむろに立ち上がった。帯を解いて前を開けると、賀茂のソレに勝るとも劣らない不気味な逸物が姿を現す。

「このように若い娘子を犯すのは、さて何年ぶりかのう」

老人斑の浮く顔を好々爺然と綻ばせながら、御影の尻肉に皺だらけの手を置いた。枯れ木のような指を喰い込ませつつ、慎重に高さを合わせて腰を前に動かす。

「んぁっ！　ん……んンんぅっ！」

繊細な肉花弁が熱く硬いモノに掻き分けられた。壺口に弾力が触れる。肉のくさびが膣穴に鼻先を埋め、ググッと圧力が増して――。

（あ、ああ……大きいっ！）

巨大なモノが胎内に潜り込んでくる。一瞬、破瓜の痛みを思い出して背中が強張ったが、淫棒に擦られた肉穴の縁からは心浮き立つような快感しか染み込んでこない。あまりの太さに限界まで伸びきっていることは分かるのに、なぜかそれが心地よい。

「ほう、ほうほう――温かいのう。おお、蕩けそうじゃわい」

すぐにでも昇天しそうな顔を天井に向け、大きな溜息をつく老人。淫呪に冒された少女の粘膜穴は大量の愛蜜を含んで柔らかくほぐれ、密生した肉襞をそよがせて山城の巨根を歓迎する。まだ中程までしか入り込んでいないが、それでも十二分に心地よい。

「さて、ともに極楽へ行こうかの」

一呼吸ついた老人は、少女の腰を抱え込むようにして残りの半分を押し込んだ。亀頭のエラが膣襞を切り裂くように掻き分け、硬い鼻先が膣奥に突き出た瘤状の子宮口を突き上げる。

「ん……ぁ、ああっ！」

強烈な肉悦が背骨を駆け上がり、御影の脳を直撃した。咥えていた肉棒を吐き出し、喉を反らして嬌声を漏らす。全身の感覚が薄れ、貫かれた肉穴だけが意識される。

「は、入ってる……わ、私の中に……入ってる……」

「そうだとも、入っておるぞ。そら！」

深々と突き立てたまま、老人が腰をグルンと回した。電撃に打たれたように少女が背を

反らし、掠れた声を漏らしつつ黒髪を振り乱して身を捩る。
「大袈裟な奴だ。それほど激しくしてはおらんぞ」
悶え苦しむ御影を見下ろしながら、山城はゆっくりと抽迭（ちゅうてつ）した。それだけでも、繊細な膣洞には十分な刺戟となる。
「だ……ダメ、動かないで……あ、あぁあっ！　動いちゃイヤァッ！」
異様な男根が胎（はら）の中で暴れる。押し寄せる快感の波に翻弄され、御影は悲鳴を上げた。亀頭が粘膜襞を掻き回し、陰茎が肉穴を捲り返すと目の眩むような強い光が走る。子宮を突き上げられると息が詰まるほどの悦感が生まれ、全身から力が抜けてしまう。
「あぁぁっ！　あぁあっ！　やめ……やめてぇっ！」
「うるさい奴だな。会長の気が散るだろう」
賀茂が少女の頭を押さえ込み、再び口へ男根を押し込んだ。一瞬苦しそうに顔を顰める御影だが、注ぎ込まれる気の温かさに気づくと心地よさげに目を細める。身体がほぐれると膣が弛まり、肉塊の動きが柔らかく感じられるようになった。
（あ……あぁ……そんな、どうしてこんな……）
舌の上に乗り、頬の内側に擦れる肉棒が頼もしい。肉襞を掻き混ぜ、粘膜を捲り上げ押し込んで出入りしている太さが心地よい。
口と膣を犯された少女は、犬のような姿勢のままゆるゆると腰をくねらせた。無意識の

動きだったが、そうすると胎内に潜り込んだ肉棒が別の場所に擦れ、新たな快感を生むことを知り、
（こんなの、いや……いやなのに……）
やめられなくなる。
男の腰遣いに逆らうように、大きな尻が左右に振れる。身体が揺れるたび、縦に伸びた朱唇の端からダラダラとよだれが垂れ落ちた。貫かれた淫穴は、押し込まれると泡立った牝汁を噴き出し、引き出されると紅い粘膜を捲り返して蜜をこぼす。悦びが胸を満たし、不快感はいつの間にか消えてしまった。
「やはり若い娘はよいのう。締めつけが違う……それに、うむ、よい香りじゃ」
腰を擦りつけるように動かしながら、山城は軍礼服に包まれた少女の背に覆い被さり頬を擦りつけた。脇の間から手を伸ばし、骨張った指を乳房に喰い込ませる。
「おお、よい手触りだ。肌はしっとりとして掌に貼りつき、肉は柔らかく芯に若い弾力がある。揉み甲斐のある乳じゃ。乳首はどうじゃ――おお、コリコリしておるわい」
萎びた指は肉突起を抓み、ぎゅうぎゅうと圧しながら先へ向けてしごいた。愛撫に蕩けた脂肉の塊に鮮烈な快感が突き刺さる。
（ああ……私、おかしくなってる……こんな汚らわしい男たちに……）
弄られ貫かれているのに、嬉しさばかりが込み上げてくる。肉塊が膣襞を掻き回し子宮

を突き上げると、桜色の靄が思考を覆った。舌や唇に感じる淫棒は甘露の味わい。揉まれる胸乳はポカポカと温かくなり、もっと触って欲しいと思ってしまう。
「さあ、そろそろイくか――」
呟いた山城が、低く呪文を唱えながら動きを速めた。ビクン、と反り返りそうになる御影の頭を賀茂の大きな手が押さえつける。
「んっ⁉　んンぅ……」
「苦しいか？　楽になりたかったら俺を気持ちよくしろ」
そんなことを言われても、どうしたらいいのか分からない。しかし戸惑っている間にも男根の動きは激しさを増し、御影を追い立てている。
ぐじゅり、ぐじゅり、ぐじゅり……ぬちゃぬちゃぬちゃぬちゃ……。
三回深く突き込まれ、六回浅く素早く動かされると、少女は獣のように呻きながら身悶えた。質の異なる肉悦が交互に生じ、御影の意識を攪拌する。入り口付近の小刻みな刺戟には飛翔感を覚え、奥深く押し込まれると墜落するような錯覚を感じた。身体がどんどん熱くなり、汗が滝のように流れる。突き込まれるたびに声が漏れそうになるが、口を塞ぐ肉塊のために喉を鳴らすことしかできない。お湯の中で溺れているような息苦しさに頭が朦朧としてくる。
「んぱ、んちゅんちゅ……ちゅぢゅぢゅ……」

ワケが分からないまま、舌の動きを強めた。溢れ出る唾液を飲み込みながら、唇で肉茎を搾りつつ頭を上下に動かす。頭を撫でる手の優しさや男の漏らす息づかいを頼りに、次第に舌技を獲得していく。

「いやらしい娘子だのう。そんなにペニスが好きか」

山城の嘲笑が羞恥心を刺戟するが、御影は男根をしゃぶり続けた。強く吸引すると、それだけ多くの気が流れ込んでくる。上顎に、舌に、頬の内側に熱い弾力が触れると、気が遠くなるような悦びが湧いてきてイヤな気持ちを掻き消してしまう。

（いい……これ、いい……）

頭の芯が痺れてきた。気持ちよさに導かれるまま、黒髪を揺らして首を振る。

――と。

「んぁっ！　ん、ん、んぅ、んンっ！」

肉壺の中に強烈な悦感が次々と炸裂した。反応を示さない少女に鼻白んだ老人が、掘削機のように激しく腰を振り始めたのだ。山城の動きは年齢を感じさせないほど小気味よく、腰が打ちつけられている尻からはパンパンとリズミカルな音が立つ。

膣の中を深く、力強く突かれ、硬い鼻先で子宮の入り口を叩かれるたび、脳裏に眩い光が閃いた。捻れた肉棹に擦られ捲り返されている膣口からは愉悦の津波が起こり、背を波打たせ汗ばませる。

『第九章　淫儀の果てに』より

細められた猫目から熱い涙がこぼれ、喘ぎ震える朱唇の端からは白い粘液の混じったよだれが垂れ落ちる。犬の格好をした伸びやかな肢体に花霞が浮き、毛穴という毛穴から咽せるほどに濃い牝の匂いを含んだ汗の霧が噴き出してきた。

乳首からは煮詰まった母乳が溢れ出し、ギュッとしがみついている邪神の嬰児の喉を潤す。高く持ち上げられた陰部の筋肉が緊縮し、膣洞に溜まった女汁をこぼした。

（あ……ああ……）

背骨が折れてしまいそうなほど仰け反って硬直した身体の中には、めくるめく陶酔感の余韻以外はなにも残っていない。自分が誰で、どうしてここにいるのかさえ分からないし、そんなことはもうどうだっていい。

ただただ、逞しい肉棒が欲しかった。

膣穴を貫き、掻き回して、なにもかも忘れられる絶頂の極みに追い上げてくれる、雄々しい男根が欲しかった。

恍惚の高潮がゆっくりと引いていくと、猫目が哀しそうに歪む。去っていく肉塊に裏切られたような気分になり、切なさが込み上げてきて涙がこぼれてしまう。

（どうして……どうしてなの？　アタシ、こんなになってるのに……）

虚しさを覚えた肉穴に自らの指を沈め、壺肉を捲り返して淫水をこぼしながら、

「……してぇ……もっと、してぇ……」

居並ぶ男たちを熱っぽい瞳で見上げ、舌足らずな声で喜悦の強張りを求めた。はしたない姿に嘲笑が浴びせられるが、肉芯を情欲の炎に焦がされた零はますます媚びた笑みを浮かべ、膣壺の入り口を激しく掻き回す。

「大丈夫、まだまだしてあげるよ。マハーカーラ様に一柱になっていただくためには、零ちゃんのいやらしい気がもっともっと必要なんだ」

青龍が言い、蜜に群れ集まる蟻のように零の裸体へ幹部たちの手が伸びた。腕を掴んで万歳するように引き伸ばし、膝を抱えて左右に割り開く。いくつもの手指が硬く張った乳房を掴み、力強く沈み込んで芯の疼きを揉みほぐした。

「はぅぅ……っ！　そこじゃない……おっぱいじゃないのぉっ！」

揉み潰された乳首からも尖った快感が突き刺さってくるが、刺戟を求めているのは別の場所――異形の嬰児に蹂躙され、欲望の卵を産みつけられた肉穴のほうだ。

「突いてぇっ！　あ、アタシを……ぐちゃぐちゃにしてぇっ！」

身体を揺すって痴女のごとく哀願する女呪術師の上に、ニヤニヤと笑った男が覆い被さった。肉茎に手を添えて亀頭の先を花芯に添え、体重をかけて押し込んでいく。

ぐじゅぷぷぷ……。

「あふぅ……ンっ！」

硬い怒張に掻き分けられた肉ビラから肉悦の波が湧き上がり、子宮口を突き上げられる

と極みの感覚が炸裂する。数度突かれただけで舞い上がり、我を忘れて踊り始めた。
「ああ、いい……突いて、お願いもっと激しく突いてっ！　滅茶苦茶にしてぇっ！」
男の首にしがみつき、腰に脚を絡みつかせて、自ら腰を擦りつける女呪術師。全身を巡る血潮がすべて淫毒に変わってしまったかのように、身体のあちこちが性欲の疼きを発している。激しく子宮を揺さぶられてもまだ物足りないような気がして、啜り泣きながら哀願した。
「もっと、もっと挿入(いれ)てよぉ！　硬いのをねじ込んでよぉっ!!」
「ったく、贅沢な奴だ」
苦笑した男が悶え泣く少女の背に腕を回して抱きかかえ、自らが仰向けになって腹の上に寝かせると、露わになった尻肉に別の男が取りついた。
「あ……くぅぅ……っ！」
鳶色の肛門を押し分けて、石のように硬い肉くさびが打ち込まれる。括約筋をゴツゴツした太さにねじ開かれると、背中の筋肉が攣れて首が上がった。腸腔に潜り込む太さを表現するかのように、口が「ア」と「オ」の中間の形に開いていく。
（あ、ああ……お、お腹の、中が、こ、擦られているぅ……！）
繊細な直腸壁に擦れる陰茎が新たな悦びをもたらした。前後の肉穴を貫いた肉棒が異なるリズムで抽迭を始めると、牡槍に挟まれて揉みくちゃにされた会陰部奥の薄い肉膜で淫

悦の爆弾が炸裂する。
「あぅぅッ！　いい、イィっ！　熔けちゃう、熔けちゃうぅっ！」
自らも身体を揺すり、頂点へ向けて駆け上がっていく。焦点を失って虚空を彷徨う瞳に、天上界から降り注ぐ眩い光のカーテンが映っていた。脳裏ではパチパチと火花が散り、極みの瞬間が近づいてくる。
あと少し、あと少し――――なのに、零が上り詰めるより先に男が硬直する。
「そ、そんなぁ……まだ、イッてないのにぃぃ……っ！」
どぷん、どぷんと脈打つように迸る奔流に膣奥を叩かれた零は、舌足らずな声で喘ぎ求めた。下腹に染み広がる牡粘液の温かさにますます欲情し、肉茎を失って虚しく捩れる肉穴に自らの指を挿入て掻き回してしまう。
「しょうがない。誰か犯ってやれ」
膝裏に手がかかり、幼子が小便させられるような格好で抱き上げられた。膣穴ほどに敏感になった肛門がこじられ、直腸を貫く肉棹の角度が変わり、自らの体重でより深く受け入れてしまって一瞬息が止まる。背の側から圧された蜜壺が歪み、見せびらかすように突き出された秘部の割れ目から精液混じりの淫液が溢れ出た。
「やぁ……い、入れてぇ……おちんちん、入れてぇ……っ！」
確かな地面から引き離された不安よりも股間に疼く虚しさが哀しくて、しがみつくモノ

を探して細い腕をくねらせる。順番待ちをしている男たちが手を伸ばし、たぷたぷと揺れている胸の肉果を掌で持ち上げ、紅く腫れ上がった肉突起を指の腹で揉み潰すと、
「きゅぅうん……い、いやぁ……意地悪しちゃいやぁ……！」
脂肉の塊に染み広がる媚感に仔犬のような声を上げ、頑是ない幼子のように手足を振り回した。数時間前までは精悍な女呪術師だったのに、いまはすっかり肉欲の虜である。宙に持ち上げられていることも分からずに、激しく腰をくねらせて悦びの棒を要求した。
今度は俺の番か、と男が前に立ち、ペニスに手を添えて腰を寄せる。淫唇の縁に感じた肉塊の硬さが、膣口を擦り粘膜襞を掻き分けて突き進み、子宮口を突き上げた。
「あ、あぁあ……っ！　そ、それ、イィッ！　お、奥を、奥を突いてぇ――っ！」
圧し歪められた子室の中で強烈な悦感が爆発し、堕ちた女呪術師は乳房を揺すり上げながら反り返る。天井を仰いだ猫目は至福の形に細められ、半開きの唇からは息のような声が溢れ出した。少女を前後から挟み込んだ男たちが腰を擦り上げるように動かすと、
「あぅあぁあああっ！　い、イイッ！　あ、あぁ……飛ぶぅっ！」
膣奥に突き刺さる衝撃と掻き混ぜられた腸壁の心地よさに、瞬く間に再び極みの高度へ達してしまった。男の首にしがみつくことも忘れ、胸を反らせて硬直。乳房は弾けそうなほど膨れ上がり、頂点に実った肉蕾から熱いミルクがぴゅくぴゅくと噴き出す。
「おお、こりゃあいい……揉み搾ってくるぞ」

絶頂感に捻れ蠢く肉穴を穿ったふたりの男は数度腰を振っただけで臨界点に達し、ほとんど同時に精を放った。満足した顔で零を降ろすと、すぐに次の男へ明け渡す。

「ああ、いや……ぬいちゃやらぁ……やめちゃいやぁ……っ！」

蓄積した愉悦が脳を蕩かし、舌が巧く回らない。次々と湧き上がる肉欲のせいで、男根を感じていない淫らな洞穴が強烈な飢餓感を訴えながら捻れてしまう。

「ちょぉらぁい……おちんちん、ちょぉらぁい……」

一分一秒の間隙も惜しくて、脚をM字に開き、自らの指で肉ビラの疼きを慰めながら、周囲を取り囲んだ男たちにねっとりとした流し目をくれて牡肉を求める女呪術師。見下ろす幹部たちの顔に侮蔑の薄笑いが浮く。

「あれほど生意気だった呪い屋が、ずいぶんとまあ、可愛くなったものだ」

「それほど欲しいのなら、犬の真似でもしてみせろ」

命じられた猫目の少女は、なんの躊躇いもなく四つん這いになる。呆けた笑みを浮かべながら尻を左右に揺らしつつ這い回り、わんわん、わんわんと鳴き真似までしてみせた。

「なんだそれは？　そんなことならバカでもできるぞ。もっと犬らしいことをしてみせろ」

意地の悪い要求に少し考え込んだ呪い屋は、あることを思いついて片脚を上げた。大きく開いた太腿のつけ根に、粘膜ビラの華が咲く。うん、と下腹部に力を込めると、鶏冠のように波打つ肉花弁が淫蜜を滴らせながら震え――。

しゃぁぁぁぁぁ……。

薄黄色の液体が筋を描くほどの勢いで迸り出た。いつから我慢していたのか、みるみるうちに大きな水溜まりができる。排尿のもたらす解放感に、猫目がうっとりと細められた。尿道を駆け抜けていく奔流が生む微細な振動にクリトリスや膣口の裏側をくすぐられて、背筋がゾクゾクするほど気持ちいい。

「見られながら小便をするのがそんなに好きか？　変態だな」

浴びせられる嘲笑に、淫奴隷と化した女呪術師は媚びた笑みを返す。

「そおやよ、アタシ、へんたいやよ……らから、おちんちんちょぉらぁい……」

熱くて硬いペニスが、無性に欲しかった。

膣穴でなくてもいい。こうなったらもう、どこでもいい。

身体のどこかで逞しい男根を感じられれば――。

「さあ、ご褒美だ。コレが欲しいんだろう？」

巫山戯（ふざけ）た声に顔を上げれば、頭上に見事な逸物が勃起していた。クッキリとしたエラに、青筋の浮き上がる肉茎。滲んだ粘液にぬらぬらと光り、誘うように揺れている。

「そ、ソレ……ソレが欲しいのぉ……」

淫靡な笑みを浮かべつつ、夢中で男の腰にしがみつき、太い脚に乳房を擦りつけながら美味そうな肉塊にむしゃぶりつく。舌や唇に感じる弾力が愛おしく、味蕾に広がる甘辛さ

がたまらなく美味しい。
むちゅぱ、むちゅぱ、むちゅぱ……。
口の中に含んで一心不乱に舐め搾っていると、
「こっちの穴にもご褒美が欲しいか？」
うしろに突き出した尻肉に、男の手が載せられた。硬くて熱い亀頭の鼻先が尻割れのラインを辿り、肛門を掠め、会陰部をなぞり、媚肉の畝を焦らすように擦る。
「ンむぁ……そ、そこぉ……おちんちん、そこぉ……いじわるしないれぇ……」
悦洞の手前で足踏みしている憎らしい肉棒を求めて、零は駄々っ子のように身体を揺すった。片方の手を股間に伸ばし、淫肉を掻き分けて肉ビラを開きながら、早く挿入てもらおうとして口に咥えた肉茎をますます激しく舐めしゃぶる。
前とうしろの男が別人であることも分からなくなっていた。究極の快感を与えてくれるという点では、ペニスはどれも変わらない。自分の行為が至らなくて意地悪されているのかと思い、ますます吸引を強めた。頬を窄め舌を絡め、激しく首を振って垂れ落ちるよだれを撒き散らしながら、じゅぷじゅぷと卑猥な音を立てる。
「よしよし、いい仔だ。挿入てやるぞ」
男の声とともに肉の切っ先が上を向き、蜜に濡れた肉アケビの中へ潜り込んできた。
待ち焦がれていた感触。

力強く動き始める。
剛直に擦られた肉縮緬で快悦の爆竹が鳴り響き、激震を伴った歓喜が脳をシェイクする。太陽を孕んでしまったかのように全身が熱くなり、蕩けた脂肉が毛穴から噴き出して甘美な牝香を撒き散らした。
「あぅーっ！　ぐちゃぐちゃやよぉ、アタシのなか、ぐちゃぐちゃになってるろぉ！」
抜き差しされる太いタクトに操られ、紅潮した女体が淫らな踊りを披露する。腕を曲げて沸騰する双房をマットに擦りつけ、ムチムチした太腿を波打たせながら、男の腰に搗かれて腫れ上がり指に揉み込まれて餅のように柔らかくなった媚尻を振った。掻き回された粘膜洞穴から脳天へ向けて官能の閃光が走り抜けるたび、喉を反らせ、震える媚声で淫語を口走りつつ快楽の階(きざはし)を天辺まで駆け上がる。
（あ、ああ……来る……来る来る来るぅぅっ！）
瞼の裏で強い光が炸裂し、頭の中が真っ白になった。
弾かれたように顔を上げ、アァ、と一際高い声を上げると、弓なりに反った背が硬直。下腹部から太腿にかけての筋肉がピィンと緊張し、男のモノを搾り上げる。
「なんだ、もうイッたのか？　俺はまだだぞ」
仰け反って痙攣する零の腰を抱え、男が激しく尻を振り始めた。掻き回された肉坩堝の中で極みの瞬間が次々と爆発し、上り詰めたその場所からさらに上へ追い込まれる。真っ

白な光が間断なく閃き、そのたびに絶頂感が突き抜けて、
「オォオッ！　オオオォォ――――――ッ！」
零は低い声で吠えながら狂ったように肢体を揺すり続けた。
乱れる少女に応えるように、膣奥を粘液の塊が叩く。子宮の中にまで流れ込んでくる白濁液の温かさが至福の微笑みを誘い出した。
用を済ませた男根が、蕩けた粘膜襞を絡みつかせながら抜け出ていく。未練がましく亀頭に絡みつき、信じられないほど伸びた壺口が、じゅぽん、と粘った音を立てて元の形へ戻った。淫らに花開いた肉薔薇が喘ぐようにヒクつきながら窄まっていくと、奥のほうから白く濁った大量の粘液がごぼり、ごぼり、と溢れ出てくる。
余韻をじっくりと味わう間もなく、肩に手をかけられて俯せに転がされた。腰が抱え上げられ、精液に汚れて蕩けきった直腸を貫かれる。
「くはぁうっ！　お、おひりぃ、おひいぃいっ！」
抉られた場所から発した激烈な感覚に喘いでいると、髪を掴まれて無理矢理起こされた顔の前に肉茸が突きつけられる。精臭にうっとりとした零は夢中で舌を伸ばし、先端の縦割れした小さな穴を穿り、裏側に走る肉絃を舐め、男の服にしがみつきながら喉奥に届くほど深く咥え込んだ。
「んじゅ……んじゅ、んじゅんじゅ……」

淫毒に冒されたせいか、口腔粘膜が蜜壺と同じくらいに敏感になり、弾力の奥に鋼の芯を秘めた肉棒に擦られると頭がおかしくなるほどの悦感が爆発した。硬さをもっと感じたくて舌を絡め、頬を窄め、激しく首を捻り振って男のモノを舐りしごく。

肛腔を穿つ強張りが前後に動くたびに股間の淫泉が湧き返り、口を犯した亀頭が咽喉蓋を叩くたびに頭が真っ白になる。消化器官の入り口と出口を塞いだ男たちが腰の動きを速めると、喜悦は徐々に強くなり、間に挟まれた零はたちまち絶頂へと舞い戻っていた。

（イイ……コレ、もっと……欲しい……ちょうだい……もっと、もっと……）

めくるめく快美感に朦朧となりながらさらなる境地を目指して求め喘ぐ呪い屋の手に、熱い塊が握り込まされた。掌に感じる頼もしい弾力、指腹に触れる勇ましいカリ首の形。何気なくしごいてみると、男の悦びが伝染したように掌が気持ちよくなってきた。

内側から圧されて交互に膨らむ左右の頬に、外から硬いものが押し当てられる。青臭い粘液を塗り込んでくるコレは……。

「んぁ、おひんひんが……ぶっろいおひんひんぁ、こんな、らくさん……」

淫靡に微笑む少女の蜜洞にも、逞しい強張りが潜り込んできた。

雄々しく張ったエラに掻き回された膣襞が、紅玉のような亀頭に叩き揺さぶられた子宮が、頭の天辺まで突き抜けるような鋭い快感を生み、繰り返し爆発する極限の肉悦に腰がどうしようもなく捻れ悶えてしまう。

武骨な指に乳肉を搾られ、びゅくびゅくとミルクを噴き出す肉突起が捏ね潰されて、肉鐘が煮え蕩ける。沸騰した血流が毛細血管の隅々にまで愉悦の毒を送り込み、ただの柔肌までをもクリトリス並みの性感極点に変えてしまった。淫汗の皮膜越しにぬめり擦れてくる男たちの筋骨は、三つの肉壺を占拠したペニスと同じ感触。

まるで巨根の生い茂るジャングルに迷い込み、自在に動く肉茎の蔦に搦めとられて身体のあちこちを揉み舐められているかのよう。

全身性感帯となった肢体を隈なく擦り上げられ、淫口という淫口を穿たれ、双球がちぎれてしまうかと思うほど強く搾乳されていた。

妖しく蠢く男根の群に身を任せているだけでも絶え間なく喜悦の瞬間が襲いくるのに、欲望の奴隷に堕ちた女呪術師は肉棒が動くより先に、柔肉を揉み捏ね回す指を待たずに、自分から身体を揺すり、肌を擦りつけてもう一段上を求める。

（あぁ……ああ、ああ、あああああっ！）

男たちの動きが速く、激しくなってきた。

零の息も乱れに乱れ、心臓は早鐘のごとく打ち鳴らされる。

どこまでも高く、光よりも速く、恐いくらいに加速して――。

「ん……んんンォオ――――――ッ！」

突如、雷撃に打たれたように反り返り、口といわず肛門といわず穴という穴がすべて開

きっってありとあらゆる媚蜜が噴きこぼれた。
耳朶や乳首、股間の肉芽は破裂しそうなくらいに充血し、赤々と光る柔肌からは甘酸っぱい湯気が立ちのぼる。
天地の感覚が喪失し、無重力空間に浮かんでいるような錯覚を覚えていた。
瞼の裏には煌めく光の粒が渦を巻き、まるで星々の海に溺れているかのよう――。
（す……ご、い……）
恍惚を通り過ぎて呆然となる呪い屋の顔に、
――どぷぷ！　びゅくり、びゅくびゅくッ!!
と白濁液が吹きかけられた。
喉奥にも、結腸にも、子宮口にも熱い汚液が注がれる。
全身を包み込む濃密な精香が、いつもなら一瞬しか止まっていられない桃源郷へ繋ぎ止めてくれた。
男がひとり、またひとり、と離れていっても、零は至福の笑みを浮かべたまま呆けたように弛緩していた。
全身の柔肌を花霞のように紅くまだらに染め上げ、自らの身体から溢れ出たさまざまな粘液にまみれ、だらしなく開いた唇や肛門、肉壺から大量の白濁液をこぼしつつビクン、ビクンと痙攣する。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/